

映像ドキュメンタリー制作指導の研究

——女子大での教育実践を考察——

柝 窪 優 二*

Research Into Teaching Documentary Production

—A Consideration of the Practical Training at a Japanese Women's University—

Yuji TOCHIKUBO

はじめに

高性能で低価格のビデオカメラ・編集機材の出現やインターネット・動画サイトの広がりなどで、映像作品の制作・発信はテレビ局だけではなく市民レベルで容易にできるようになった。しかしながらドキュメンタリーは、映像で何をどのように伝えるのか、という作品制作の本質に関わる難しさは今も昔も変ることではない。ドキュメンタリーはノンフィクション系の映像制作者がめざす最終的な作品ジャンルであり、映像制作の原点であるとも言える。著者は民放テレビ局に30年勤務し、主に報道番組やドキュメンタリーの制作に取り組んできた。2007年に大学教員になり、映像制作を中心に教育実践を重ね、2009年ころからはゼミ学生を指導し、ドキュメンタリー制作にも取り組んできた¹⁾。これまでに社会派の作品を中心に計15本を制作・発表し、なかには全国規模の映像祭で入賞した作品もある。そこで本稿では、これまでに制作したドキュメンタリー作品の企画や制作態勢、取材・撮影、編集・仕上げ、学外連携、制作期間などの制作プロセスやその枠組みを分類・報告した上で、ドキュメンタリー制作を軸にした、大学における映像メディア教育の課題や可能性を考察した。

1. ドキュメンタリーの制作

2009年～2014年7月にかけて椋山女学園大学文化情報学部で、著者が卒業研究ゼミで学生を指導する形で、教員と学生が共同で制作したドキュメンタリー作品は下記の15本である。

* 文化情報学部 メディア情報学科

【制作したドキュメンタリー作品（長さ、完成時期）】

- ①輝く！ オシャレな街・星ヶ丘～イルミネーションの舞台裏～（9分45秒、09年9月）
- ②東山動物園物語～動物と人の鼓動～（19分00秒、09年9月）
- ③市民が手作りで平和発信～戦争資料館ピースあいち～（19分45秒、09年9月）
- ④内ヶ谷の森の輝き～女子大生が自然体験～（13分30秒、10年1月）
- ⑤今しか伝えられない！～未来に語り継ぐ戦争体験～（17分30秒、10年7月）
- ⑥介助犬が育つまで～シンシアの丘 訓練物語～（17分30秒、10年9月）
- ⑦42年目！ 宝人たちの挑戦～高蔵寺ニュータウン物語（27分00秒、11年1月）
- ⑧心の復興・石巻の願い～記者が語る被災地の1年～（29分00秒、12年5月）
- ⑨絆の駅・石巻～復興3年目の春～（23分45秒、13年6月）
- ⑩地域の絆を再生へ～女川・復興農園の願い～（17分15秒、13年6月）
- ⑪私は伝えたい！ 風船爆弾～学徒動員・女学生の証言～（18分00秒、13年11月）
- ⑫東山ゾウ物語～アジアゾウ出産の舞台裏～（23分15秒、13年5月）
- ⑬アジアゾウの誕生～東山動植物園～（24分00秒、13年11月）
- ⑭奇跡の鳥・ライチョウ～北アルプス乗鞍岳の保護活動～（16分15秒、13年12月）
- ⑮津波には負けない！～石巻・住民の思い～（17分00秒、14年7月）

☆⑬は作品⑫のリメイク版（映像を追加、ナレーターと音楽を変更）

これらの作品は学生が卒業作品として制作したものと、教員主導の作品に学生が参加した柘窪研究室・共同制作作品とがある。いずれの作品もインターネットでの動画公開を前提に企画・制作したもので、外部プロダクション等に作業を依頼することは一切なく、企画から撮影、編集・仕上げまで、すべて大学・研究室ゼミで制作したものである。

ドキュメンタリーは記録映像（記録映画）とも言われるが、社会で起きていることをただ伝えるのではなく、事実を映像で検証しなから、制作者のメッセージを伝えることが重要になる。ということは、一般的には社会情報番組や広報ビデオなどと比べると、制作者には事実を解き明かして真実に迫るための緻密な取材や、その事実を表現するための映像取材、正しい判断力、バランス感覚などが求められる。このためテレビ局では経験が浅い制作者がドキュメンタリーを担当するケースは希で、ある程度経験を積んだ中堅以上のディレクターや記者が制作者となるケースが多い。

大学における映像メディア教育では、初めて映像作品を作る学生の課題としては、初心者でも対応できる短編の社会情報作品や広報ビデオを制作するのが一般的である。しかしながらノンフィクション系の原点でもあり、最高峰とも言えるドキュメンタリーに挑戦することで、映像で伝えることの大切さや映像ジャーナリズムの本質を学ぶこともできる。そこで著者は2009年度から、ゼミ学生を参加させる形で、ドキュメンター制作に積極的に取り組んできた。2012年には「心の復興・石巻の願い～記者が語る被災地の1年～」²⁾が日本を代表するドキュメンタリー映像祭、地方の時代・映像祭に入賞したほか、「アジアゾウの出産～東山動植物園～」³⁾は2014年に科学技術映像祭で入賞するに至った。こうしたドキュメンタリーは作品ごとに制作者や企画意図、取材環境が違うので、それぞれの作品内容を比較・検討することは、それほど意味があることではない。しかしながら、教員である著者が全作品のプロデューサーを担当している点と、著者が制作に参加した学生

を指導し、大学・研究室ゼミで制作した点は共通することである。そこで作品テーマとは別に、企画や取材・撮影の期間、制作態勢、学外連携などの制作の概要・枠組みを分類・整理して、女子大学における映像メディア教育の方向性を探る手がかりがないか、検証を試みた。

2. 企画・立案

ドキュメンタリーは企画を立案することが制作の出発点になる。何をどのような事実に基づいて取り上げるのか、そのためには協力者・連携先が必要なのか、全体の取材・制作の期間はどの程度必要なのか、といった作品の全体像を決めることが第一歩となる。なかでも企画は、実際に制作することが可能なのか、という実現可能性も含めて判断することが求められる。つまり伝えたい事実やメッセージは重要でも、取材先の協力が得られない場合は作品を制作することはできないし、協力は得られても制作者側の都合で取材・撮影ができない場合も作品を制作することはできない。また作品テーマについては、ただドキュメンタリーを作れば良いのではない。制作者がめざすテーマや方向性（路線）とある程度一致する必要がある。それを念頭に、これまで制作した作品について、企画者、作品種別、協力・連携先、制作期間を表1にまとめた。

表1 制作したドキュメンタリー作品の概要

作品名	企画者	作品種別	協力・連携先	制作期間
①イルミネーション	教員	地域連携	星が丘テラス	7ヵ月
②東山動物園物語	教員	地域連携	東山動植物園	7ヵ月
③市民が平和発信	教員	地域連携	ピースあいち	8ヵ月
④内ヶ谷の森の輝き	企業	企業連携	㈱中部電力	5ヵ月
⑤語り継ぐ戦争体験	教員	地域連携	ピースあいち	8ヵ月
⑥介助犬が育つまで	教員	地域連携	日本介助犬協会	1年6ヵ月
⑦高蔵寺物語	学内	学内・地域	生活科学部・村上研	9ヵ月
⑧心の復興・石巻	教員	震災記録	石巻日日新聞社	1年4ヵ月
⑨絆の駅・石巻	教員	震災記録	石巻日日新聞社	8ヵ月
⑩女川・復興農園	教員	震災記録	東北福祉大学	1年4ヵ月
⑪風船爆弾	教員	高大連携	椛山高校・放送部	7ヵ月
⑫東山ゾウ物語	教員	地域連携	東山動植物園	8ヵ月
⑬アジアゾウの誕生	教員	地域連携	東山動植物園	11ヵ月
⑭ライチョウ	教員	大学間連携	信州大学・生態学研	5ヵ月
⑮津波には負けない	教員	震災記録	地元住民	1年

企画・立案者については、15本中13本は教員（著者）であった。本来は学生からの企画提案が多いことが望ましいが、学生ゼミの指導が3年の後期からスタートする現状では難しいことである。作品種別では、8本が地域と連携したもので、3本が他学部・他大学・高校（椛高放送部）との連携、4本が東日本大震災関連であった。これにともない制作の

協力・連携先は、地域の団体・行政、大学や高校、被災地の新聞社などとなっていた。1本だけ企業からの提案による企業連携の作品があった。制作に費やした期間は、短いケースでは、「④内ヶ谷の森の輝き」と「⑭ライチョウ」が5ヵ月、期間の長い震災被災地・石巻の作品などでは1年～1年4ヵ月となっているが、全体としては7～9ヵ月で完成している作品が多い。これは大学・研究室ゼミで制作することを前提に企画しているからである。全体を見ると、教員・プロデューサーの著者が企画し、地域と連携して、半年～1年の期間で制作しているものが多く、大学・研究室ゼミで制作するドキュメンタリー作品という性格を浮き彫りにしている。

3. 制作者の役割・担当作業

作品を「学生の卒業作品」か「教員の作品（学生が参加した研究室の共同制作作品）」なのかを分類した上で、制作過程での学生参加の状況を表2にまとめた。

◎は学生が担当（教員が指導）、○は学生と教員が担当、△は学生が一部担当、×は教員が担当、を意味している。

表2 制作過程での学生参加

作品名	作品形態	取材・撮影	台 本	ナレーション	編集・仕上げ
①イルミネーション	卒業作品	◎	△	◎	◎
②東山動物園物語	教員作品	◎	×	◎	○
③市民が平和発信	卒業作品	◎	△	◎	◎
④内ヶ谷の森の輝き	卒業作品	◎	△	◎	◎
⑤語り継ぐ戦争体験	卒業作品	◎	△	◎	◎
⑥介助犬が育つまで	卒業作品	◎	△	◎	◎
⑦高蔵寺物語	卒業作品	◎	△	◎	◎
⑧心の復興・石巻	教員作品	×	×	◎	○
⑨絆の駅・石巻	教員作品	×	×	◎	○
⑩女川・復興農園	教員作品	×	×	◎	○
⑪風船爆弾	教員作品	○	×	◎	○
⑫東山ゾウ物語	教員作品	○	×	◎	○
⑬アジアゾウの誕生	教員作品	○	×	◎	○
⑭ライチョウ	教員作品	×	×	◎	○
⑮津波には負けない	教員作品	△	△	◎	○

卒業作品については、台本作成だけ「学生が一部参加」で、取材・撮影、ナレーション、編集・仕上げは「学生が担当（教員が指導）」で、学生主体の制作形態となっている。台本については、本来は学生主体で作成すべきものであるが、映像制作を専門に勉強している学生ではないため、限られた期間で台本を書けるようになるまで指導できなのが現状である。このため結果的には教員が主体で台本を作成する形となっている。教員作品は、教員が研究テーマとしている東日本大震災の映像記録ドキュメンタリーや、教員が学生の作

品とは別に独自に企画・制作した作品である。こうした作品は「教員作品」なので、取材・撮影は教員が担当し、学生が制作に部分的に参加している。教員が取材・撮影しているので、その流れで教員が台本を作成して、映像の全体的な編集をしている。学生はナレーションの収録、選曲、ナレーション・音楽などの音声編集、作品の最終確認・仕上げを担当している。ただし「⑮津波には負けない」については、学生4人が宮城・石巻の現地取材にも参加し、取材・撮影に一部参加した。

4. 取材・撮影

ドキュメンタリーを完成するまでの撮影回数、取材期間、使用したカメラ台数（最大）、カメラの映像形式、作品でのリポーター起用について、表3にまとめた。

リポーターについては、○=リポーターを起用、△=リポーターはインタビュー的な起用、×=リポーターなし、を意味している。

表3 ドキュメンタリー作品の取材・撮影

作品名	撮影回数	取材期間	カメラ台数	映像形式	リポーター
①イルミネーション	7	2ヵ月	1	HDV	○
②東山動物園物語	4	1ヵ月	1	HDV	○
③市民が平和発信	5	3ヵ月	1	HDV	△
④内ヶ谷の森の輝き	2	2日	2	HDV	○
⑤語り継ぐ戦争体験	5	3ヵ月	2	HDV	△
⑥介助犬が育つまで	8	1年5ヵ月	2	HDV	△
⑦高蔵寺物語	5	4ヵ月	3	HDV	○
⑧心の復興・石巻	10	1年	1	HDV	×
⑨絆の駅・石巻	7	7ヵ月	1	HDV/AVCHD	×
⑩女川・復興農園	3	7ヵ月	1	HDV/AVCHD	×
⑪風船爆弾	5	4ヵ月	2	AVCHD	△
⑫東山ゾウ物語	7	7ヵ月	2	AVCHD	△
⑬アジアゾウの誕生	7	7ヵ月	2	AVCHD	△
⑭ライチョウ	2	1ヵ月	2	AVCHD	×
⑮津波には負けない	5	1年	2	AVCHD	×

震災関連のドキュメンタリーは撮影回数が多く取材期間は長いですが、それを除くと取材回数は5~7回程度、取材期間は3~7ヵ月の作品が多い。作品全体を見ると、取材期間はともかく、取材回数については、テレビ局等で制作するドキュメンタリーに比べて、かなり少ない状況である。これは教育現場で制作する作品なので、取材に費やす時間的な余裕がないことや、学生の指導を視野に入れた（特定学年の学生指導期間に合わせた）作品ということが関係している。取材で使用したカメラの台数は、震災の作品は教員が単独で取材しているので1台であるが、他作品は2~3台を使用しているケースが多い。これは学生に取材・撮影の経験をさせる「教育」を意識して、メインカメラのほかにサブカメラを設定

して、学生に撮影経験を積ませているからである。ただし高蔵寺の歌・ライブの撮影では、1台のカメラでは対応が難しいケースがあり、ライブ会場で3台のカメラをカット割りして、教員と学生で役割分担して撮影したケースもあった。使用カメラは当初はテープに記録するHDVカメラを使用していたが、2012年度ころからSDカードに映像データを記録するAVCHDカメラを使用するようになった。HDV・AVCHDとも業務用カメラをメインに、民生用ハンディカムをサブカメラとして併用している。AVCHDカメラだと、テープを使用しないので録画時のヘッド不良等のトラブルを回避できる上、1つの記録メディア（SDカード）への収録時間が長いことや、編集PCへのキャプチャー（データ取り込み）が短時間にできるなど利便性が高く、AVCHDカメラを使用開始してからは、HDVカメラは全く使わなくなった。

リポーターは、卒業作品の場合は全ての作品でリポーターを起用する構成にしている。これは学生が映像コンテンツを制作する過程で、みずから現場でレポートすることは貴重な経験になると考えていて、教員・プロデューサーがそうした作品構成を求めているためである。ドキュメンタリーは、誰がどのような視点で事実を伝えるか、という制作者の視点が重要なので、卒業作品では学生の視点をできる限り作品に盛り込みたいと考えている。ただし社会情報番組や広報ビデオなどに比べると、リポーターの重要度は低く、インタビュー程度の役割にとどまっているケースも多い。

5. 編集・仕上げ

取材・撮影のあとに、映像を編集して作品を仕上げる過程について、表4にまとめた。作品の編集・仕上げはコンピューターによるノンリニア編集を使っている。これまでの作品は主にEDIUS Pro4, EDIUS Pro5というテレビ局などでも多く使われているプロ用の映像編集ソフトを使っている。「仮ナレーション」は制作過程で仮ナレーションを入れて映像編集・音響効果などを確認したかを示している。「仮完成版」は仮ナレーションを入れた状態で字幕スーパーと音響効果を完全に施して作品の最終確認をしたかどうかを示している。「MA処理」は音声スタジオを使った音声の最終ミキシングをしたかを示した。

初期の作品は、仮ナレーションを入れたり、仮完成版で最終確認したりすることはなかった。しかし様々な作品を制作していく過程で、ノンリニア編集では仮ナレーションの挿入や仮完成版の作成・修正が容易なことわかってきた。そこで2010年ころからは、仕上げ・確認の段階で全面的に仮ナレーションを入れた仮完成版を作成し、最終の確認・修正をするようになった。テレビの制作現場では、短時間に編集・仕上げをする必要があることや、ナレーター確保が容易でないことから、仮ナレーションを入れて仮完成版を作成して、最終的な仕上げ・修正をしているケースは少ないのが現状である。しかしながら大学などの教育現場では作品を制作することも重要だが、その制作過程で映像表現の特徴や意味、映像メディアで伝えることの大切さを教えることも重要になる。そうした意味では、このような編集・仕上げ手法は教育現場で極めて有効な制作プロセスだと考えられる。

MA処理というのは、編集済み映像・音声を音声スタジオに搬入して、マルチチャンネル・ミキシング装置で編集音声に音楽やナレーション、効果音などをミックスし音声レベルを調整して仕上げる作業である。完成した音声を一般的にはノンリニア編集やVTRテープ

表4 ドキュメンタリー作品の編集・仕上げ

作品名	編集期間	仮ナレーション	仮完成版	MA処理
①イルミネーション	3ヵ月	×	×	×
②東山動物園物語	2ヵ月	×	×	×
③市民が平和発信	3ヵ月	×	×	×
④内ヶ谷の森の輝き	3ヵ月	○	○	×
⑤語り継ぐ戦争体験	3ヵ月	×	×	×
⑥介助犬が育つまで	6ヵ月	○	○	×
⑦高蔵寺物語	4ヵ月	○	○	×
⑧心の復興・石巻	2ヵ月	○	○	×
⑨絆の駅・石巻	3ヵ月	○	○	×
⑩女川・復興農園	2ヶ月	○	○	×
⑪風船爆弾	2ヵ月	○	○	×
⑫東山ゾウ物語	3ヵ月	○	○	×
⑬アジアゾウの誕生	4ヵ月	○	○	×
⑭ライチョウ	2ヵ月	○	○	×
⑮津波には負けない	3ヵ月	○	○	×

などに戻して、作品を完成させる制作手法である。これまでに大学で制作したドキュメンタリーはMA処理を実施しないで、全てノンリニア編集でMA処理に相当する音声調整を実施した。これは大学にMAスタジオ設備がないこともあるが、前に報告した仮ナレーション収録・仮完成版をもとに作品を仕上げる手法だと、MA処理を実施することは制作作業をかえって煩雑にする結果となるからである。現在のノンリニア編集は高機能のMAスタジオ機能をすべて備えていて、技術的には音声・MAスタジオを使用する必要性はない。テレビの制作現場ではノンリニア編集は編集マンが操作し、音声調整は音声担当者がMAスタジオで行う形に分業化されていることから、MA処理を行うのが一般的になっているもので、大学等の教育機関ではMA処理は全く必要ないと考えている。これまでのドキュメンタリー制作を通して、従来のテープ編集による制作過程とは区別し、ノンリニア編集を軸にした新しい制作手法を模索し、制作者の思いを自由に作品に反映できる制作プロセスを確立することが重要で、これまでの実践研究で一定の方向性は示せたと受け止めている。

6. 作品の公開・評価

制作した作品の公開やテレビ放送、映像祭等への参加について、表5にまとめた。「評価」については、映像祭・映画祭等に参加して1次予選・2次予選・最終予選等を含めた「予選」を通過した作品は、全て「ノミネート」と表記した。

まずネット公開については、制作した作品は、すべて大学・学部サイト⁴⁾や大学YouTubeサイト⁵⁾で動画公開した。テレビ放送については、「⑦高蔵寺物語」が制作途中の段階で、地元のCATV「中部ケーブルネットワーク」で放送されることが決まって完成

後に放送されたほか、名古屋のCATV「スターキャット」で3作品が放送された。このほか2012年に地方の時代・映像祭に入賞した作品と2013年に同映像祭に出品した4作品は、全国エリアのCATV局「J:COM」や全国のCATVで放送された。映像祭への参加は、日本を代表するドキュメンタリー映像である地方の時代・映像祭に11本、知多半島映画祭に1本、科学技術映像祭に2本を出品した。1作品が複数の映像祭に参加しているケースもある。地方の時代・映像祭は「市民・学生・自治体部門」への参加だが、他の映像祭・映画祭はオープン参加で、テレビ局や映像制作会社・セミプロが制作した参加作品のなかで、それなりに評価される形となった。

表5 ドキュメンタリー作品の公開・評価

作品名	ネット公開	テレビ放送	映像祭への参加	評価
①イルミネーション	○	×	×	
②東山動物園物語	○	○	×	
③市民が平和発信	○	○	○	ノミネート
④内ヶ谷の森の輝き	○	×	×	
⑤語り継ぐ戦争体験	○	×	○	
⑥介助犬が育つまで	○	○	○	ノミネート
⑦高蔵寺物語	○	○	○	ノミネート
⑧心の復興・石巻	○	○	○	入賞 地方の時代映像祭
⑨絆の駅・石巻	○	○	○	ノミネート
⑩女川・復興農園	○	○	○	
⑪風船爆弾	○	○	○	
⑫東山ゾウ物語	○	○	○	ノミネート
⑬アジアゾウの誕生	○	×	○	入賞 科学技術映像祭
⑭ライチョウ	○	○	○	ノミネート
⑮津波には負けない	○	○	○	ノミネート

制作したドキュメンタリーは、作品ごとに内容も異なるし、企画意図、制作スタッフ、制作環境が違うので、作品の評価は単純にはできない。しかしながら、15本中、12本は映像祭等に出品できる作品だと判断でき、そのうち9本が予選を通過し、そのなかの2本が入賞したことから、一定の作品クオリティは維持できたと考えている。これまでの映像祭等への参加を通して、全国的に大学の映像制作レベルがここ5年程度で急速に高くなってきたという印象を受けている。価格が安くて高性能のカメラや編集機材が大学における映像制作を後押ししていることは間違いなく、こうした制作環境の変化のなかで、これまで以上に充実した教育を実践する必要があると実感している。



写真1 地方の時代・映像祭で入賞したドキュメンタリー「心の復興・石巻の願い」



写真2 科学技術映像祭で入賞したドキュメンタリー「アジアゾウの誕生」

7. 学生指導の課題

ドキュメンタリー制作を通して感じた学生指導の課題を教員の視点でまとめた。著者が所属するメディア情報学科は、映像制作を専門に教える教育体系にはなっていない。このためドキュメンタリー制作の指導は、学生がある程度の専門科目を履修しているものの、

映像制作を専門に学んでいないことが前提になる。こうしたなか、これまでの指導経験から感じる最大の課題は、取材・撮影のときも、映像編集の段階でも、学生が作品の全体像をイメージできないことだと考えている。このため当初はドキュメンタリーを卒業作品としていたが、その後、卒業作品は東山動物園や名古屋市科学館などの短編の広報ビデオやプロモーションビデオを制作するようにして、ドキュメンタリーは卒研ゼミの番外編という位置づけに変えた。この点に関しては、カリキュラムだけの問題ではなく、本気で映像ジャーナリストをめざす学生が少ないことなども関係していると考えられる。ただしドキュメンタリー制作を卒研ゼミの番外編に位置づけるようにしてから、教員としては弾力的に、比較的自由に、教員作品を制作できるようになり、結果的に意力のある学生が制作に参加しやすい形になり、教育的な効果は上がっている部分も多い。

もう一点は、制作に取り組む作業時間の確保という問題がある。制作したドキュメンタリーは編集・仕上げを3ヵ月程度で行っている作品が多い。一見、作業時間を十分に確保しているように見えるが、たとえば週1回＝90分のゼミで3ヵ月・12回の作業をしても、トータルの作業時間は18時間にしかならない。2012年度からゼミは2コマ連続＝3時間連続行うことにしたが、それでも3ヵ月で確保できる時間はトータル36時間で、テレビ局等の制作現場に比べると作業時間は少ない。テレビ現場で30分のドキュメンタリーを制作する場合、比較的短時間にまとめる番組の標準的な作業時間は、映像編集＝3日、音声処理・字幕スーパー＝1日、ナレーション収録・最終確認＝1日の計5日程度である。テレビ現場では1日の作業時間は12時間程度なので、単純計算すると50時間程度は費やしている。大学の場合は初心者の学生が作業をするので、作業時間はプロの2～3倍も必要で、そうした時間の確保といった部分でも課題は大きい。

しかしながら、テレビ現場とは異なる教育現場でのドキュメンタリー制作なので、現実的な条件のなかで、どのような作品を制作するのか、その制作過程をどのような形で学生の教育に活用するのか、という部分が重要になる。そうした視点では、ここ何年かコンスタントに作品が制作され、映像祭等でそれなりに評価されている現状を考えると、今後の課題はあるものの、それなりに現実的に妥当な形で、ドキュメンタリー制作を指導する教育体系になっているとも判断できる。

7. まとめ

本稿では、2009年から2014年前半までに制作したドキュメンタリー作品の企画や制作態勢、取材・撮影、編集・仕上げ、学外連携などについて、実施内容や作業期間などの制作プロセスの概要や枠組みを分類し、大学におけるドキュメンタリー制作実践の分析を試みた。これまでの分析では、大学でのドキュメンタリー制作は、教員（プロデューサー）が企画し、地域と連携して、半年～1年の期間で制作しているものが多かった。取材回数は5～7回程度、取材期間は3～7ヵ月で、AVCHD形式の業務用カメラと民生用カメラを併用し、ノンリニア編集で仕上げる作品が中心である。編集過程ではノンリニア編集の利点を生かして、仮ナレーションを入れ、仮完成版を制作し、作品全体を修正しながら作り上げる手法が有効で、MAスタジオを使用するメリットは少ないことが浮き彫りになった。

映像制作は大きく分類すると、映画などのフィクション・芸術系と、ドキュメンタリー

や社会情報番組などのノンフィクション系に分類できる。著者が所属するメディア情報学科は、基本的にはノンフィクション系が指導領域になっていて、ドキュメンタリーはその頂点に位置する作品ジャンルでもある。最近ではドキュメンタリー制作に取り組んでいる大学も多く、中央大学（FLPゼミ）や関西大学、立命館大学、法政大学、武蔵大学などは映像祭での入賞実績を残している。そうした映像祭で常連となっている大学は、主に社会学部が中心になっていること、指導教員がテレビ制作現場の出身であること、比較的規模が大きい総合大学であることなどの共通項がある。本学のような女子大でも映像制作を軸にメディア教育に取り組んでいる大学は多いが、そうした女子大でのドキュメンタリー制作の報告例はそれほど多くない。したがって今回の女子大でのドキュメンタリー制作・実践研究は、新しい挑戦とも言える。

ドキュメンタリーは制作者が社会にメッセージを発信するという視点が重要である。制作者は映像制作の技術を含めた実務を理解しつつ、社会の出来事や問題点についてどのように考えて、何をメッセージとして発信するのか、という社会科学的視点のウエートが極めて大きい。したがって学生にとっては、「伝えること」の大切さを学んで、自分を積極的に磨くことができる貴重な教育実践の場になる。著者のドキュメンタリー制作・実践研究は、本格的にスタートして5年程度で、まだ試行錯誤の段階である。しかしながら、これまでの取り組みを分析すると、大学ゼミでも対応可能な作品テーマを取り上げて、学生の指導に適した取材・撮影の期間を確保し、教育に反映できる制作手法を工夫しながら作品を制作するという点では、大学でのドキュメンタリー制作・実践モデルの一例を浮き彫りにできたと考えている。また今回は分析対象にしていなかったが、「教員の指導」という点も重要なポイントになると考えている。大学のサークルや部活動ならば、学生が自由に作品を制作する形になるが、大学のゼミでは教員が指導することが制作研究の前提になる。著者の場合は、企画段階のチェックのほか、全ての取材・撮影に同行して現地で指導・サポートしている。また映像編集、字幕スーパー、ナレーション、音響効果、音声レベル調整等の全ての作業工程を確認して、ダメ出しをし、改善案を示して、修正箇所を指導している。そうした指導は、教育機関だからと思う人もいるが、実はテレビの制作現場でも、デスクや編集長、チーフディレクターなどが日常的に行っていることである。そうした意味でも、大学でドキュメンタリーを制作するということは、学生がテレビ局などの現場と同じような制作システムのなかで、市民ジャーナリストを体験・実践できるという点で、貴重な教育実践になると考えられる。この5年間の経験を支えに、今後もドキュメンタリー制作に取り組み、女子大でのドキュメンタリー制作の意義や教育効果、映像メディア教育の可能性などを探りたい。

この研究は平成25年度椋山女学園研究助成（B）による研究成果の一部である。

参考文献

- 1) 柘窪優二ほか「地域連携によるメディア教育モデル構築の研究」椋山女学園大学 研究論集 第43号 社会科学篇 2012, pp191-206
- 2) 柘窪優二ほか「東日本大震災・映像ドキュメントの制作と発信」椋山女学園大学 研究論集 第44号 社会科学篇 2013 pp87-101

柄 窪 優 二

- 3) 柄窪優二ほか「地域連携によるインターネット情報発信の試み」椋山女学園大学 研究論
集 第45号 社会科学篇 2014 pp151-166
- 4) 椋山女学園大学文化情報学部サイト <http://www.ci.sugiyama-u.ac.jp/index.html>
- 5) 椋山女学園大学 YouTube サイト <https://www.youtube.com/user/SugiyamaUniv>